

世界一のコーヒー生産国であるブラジル。

高品質コーヒーが国内の消費を活性化させるなど、

様変わりする近年のブラジルのコーヒー事情を紹介する。

# 変わゆく 世界最大の生産国 「ブラジル」

文・写真 山口貴史

一面に広がるコーヒー畑（ヴェンダ・ノーバ・ド・イミグランテ市）

世界一のコーヒー生産国ブラジル。同国のコーヒー産業を支えるのは、いまや輸出のみではない。20年間上昇を続ける国内消費は無視できない存在となっている。

リーマンショックによる世界経済危機の影響で、2009年度の輸出額は

2960万ドル（前年比16.8%減）

だったのに対し、ブラジルの国内消費量は年間1839万俵（1俵=60kg）。前年に比べて4.15%増と堅調だった。

ブラジルコーヒー産業協会（ABIC）のハッサン・エルスコウイッチ専務理事は、09年度の輸出減少について、「今までブラジルは輸出で夢を見すぎていたかもしれない」と謙遜しながらも、「世界経済の下落は、国内市場に動搖すら与えるものではなかつた」と、農業雑誌のインタビューで答え、コーヒー消費量の国内成長に自信をのぞかせた。政府は、10年度の国内消費量を前年比5%増と見込み、12年には米国を抜いて世界一を目指す。

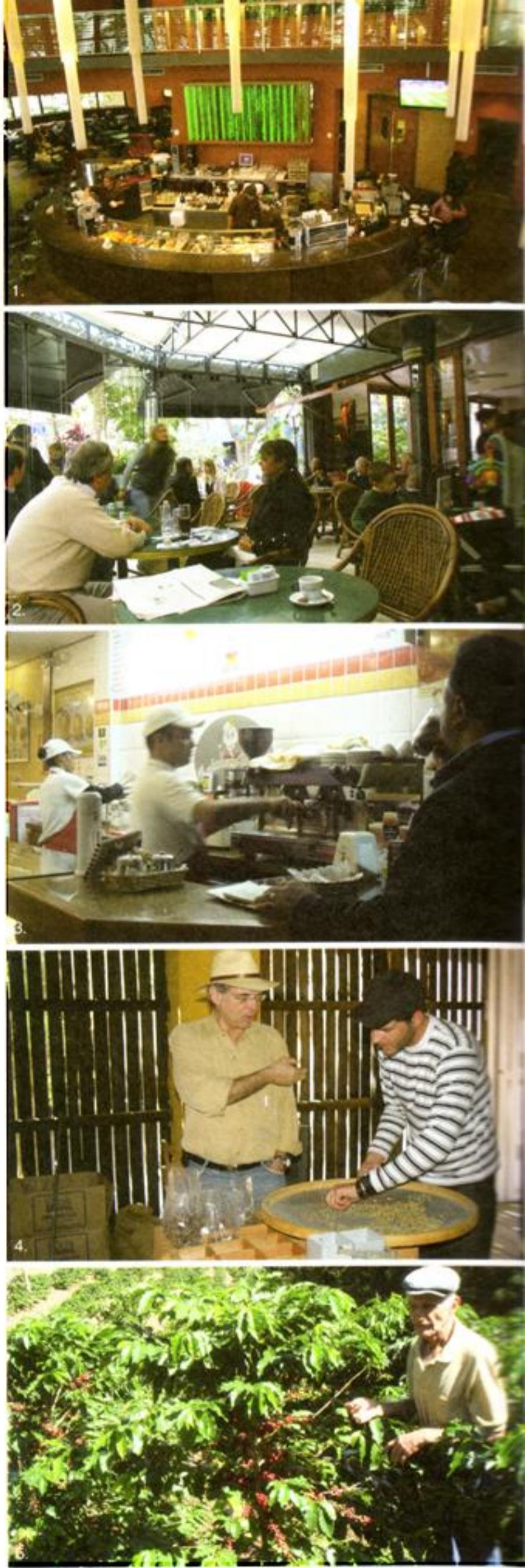
農務省によると、国内のコーヒー産業全体でのインフラ投資が、10年度に年間約8000万レアル（40億円）、広告宣伝費が5000万レアル

上質な味を求めて、人々は専門喫茶店に。

6000万レアル（25~30億円）と予想しており、ブラジルのコーヒー業界全体が国内市場に大きな期待を寄せていることを裏づける。

ABICの調査では、国内消費量上昇の理由として、①子どものときから朝食にコーヒーを飲む習慣が浸透したこと、②経済成長で生活レベルが向上し、家庭でコーヒーを楽しむ人が増えたこと、③コーヒーの品質が大きく改善されたことなどを挙げている。農務省コーヒー局のルッカス・フェレイラ局長は「コーヒーを飲む習慣は21歳以下の若者にも間違いない広がっている」と話す。

特に所得上昇による家庭でのコーヒー消費の拡大から、今度は家庭では味わえない上質の味と環境を求めコーヒー専門喫茶店に足を運ぶようになつた。外出してコーヒーを飲む人の割合は、08年度には03年比で2.7倍となつていて、店側はコーヒーの素材と品質にこだわった商品を提供。ブラジル人に



も徐々に良質なコーヒーの味を知る機会が増えることになった。

**技術指導が実を結び、生産者の暮らしが向上。**

一方、政府はABICなど多くのコーヒー関連団体とともに、1990年代に生産者に対して技術指導を実施してきたほか、設備拡張や運営資金を補助するファンドを設立。10年ほど前からコーヒーの等級制・認証制を推進してきた。

サンパウロの北、約200kmに位置するコーヒー農場、アグアス・ク

## w o r l d report

「本当のブラジルコーヒーの特徴とは、酸味がなく飲みほした後2分間、口の中にコーヒーの感触が残り、自然の甘さを思い起こさせてくれるもの。アグアス・クララスはその品質を常に維持し続けている」と、同農

**山口貴史**  
(やまぐち・たかふみ)  
1980年生まれ。大学院修了後、ブラジルに渡り邦字紙サンパウロ新聞社に入社。現在はライター、翻訳・通訳業で活動。

場のコーヒーコンサルタントであるリカルド・オリベイラさんは話す。

さて黒ずんだ実でもすべて同値で一緒に出荷していたと語る。

また、エスピリート・サント州でイタリア移民の息子としてコーヒー農園で生まれ、83歳となる現在まで父が拓いた土地でコーヒー生産一筋に生きてきたベンジャミン・フォーケットさん。彼の農園はわずか15haの農地で年間300俵ほどと小規模経営だが、「年々、生活は向上している」という。

等級制度が確立される以前の89年までは、商品価値がほとんど評価されないまま、完熟した赤い実、熟していない緑の実、太陽光に当たりす

が品質を評価してくれる。おかげで暮らしはよくなっているよ」とベンジャミンさん。

勃興するブラジル経済にあって、ブラジルのコーヒー産業もまた衰えることを知らない。

- サンパウロ市内の喫茶店。おしゃれな店が増えている。
- 週末のコーヒー専門喫茶店でくつろぐサンパウロ市民。
- お酒を飲ませる店も業務用コーヒーメーカーを置く。
- 農園の訪問者にコーヒーについて説明するリカルドさん。
- ベンジャミンさんの畠には、完熟した赤い実が成っていた。